

随 筆

断章映画館

高橋 正樹

いきなり映画の話です。

「この世界の片隅に」を見て参りました。この映画の評判は当初から知っていたのですが、なかなか見に行く機会がありませんでした。映画好きの方は、このアニメがアヌシー国際アニメーション映画祭で長編審査員賞を受賞したことはすでにご存じのことと思います。アニメーションでしか表現できない実存性があったように思います。そういえば2015年にアヌシー国際アニメーション映画祭で同じように長編審査員賞を受賞した「百日紅～Miss HOKUSAI～」の冒頭には、大きな木造の太鼓橋から俯瞰した江戸の街が出てくるのですが、昔懐かしい江戸の街を見ている気持ちにさせられます。アニメーションは、ある種のリアリティーと雰囲気私達を感じさせ、実写を凌駕する感興を演出するようです。

さて、このようなことを思いながら、私はいつの頃から映画を見ていたのだろうかと考えておりました。

子供に見せる映画はアニメではないかと思っていたのですが、家内に一番最初に見た映画をたずねたところ、チャンバラ映画、しかも字幕が出ていたので無声映画だったと思うとのことでした。私はチャンバラ映画の記憶は全くなく、もっぱらディズニー映画の記憶しかありません。ディズニー映画「白雪姫」の日本公開は1950年、私が4歳の時です。何となく記憶があるので、母に連れられて弘前の映画館で見たのだと思います。吹き替え版はなく、当初は幼児といえども字幕版を見ていたことになります。映画の内容を母に質問しながらみていたように思います。

吹き替え版は、1958年と1980年版の二種類ありますが、吹き替え版の記憶はありません。20年ほど前に吹き替え版を見たのですが、こびと達のマーチ、有名な「ハイホー」は、私の記憶の歌とは大きく違っておりました。また、英語では「Heigh-ho, heigh-ho. It's home from work we go.」ですが、日本語の歌詞

は、「ハイホー、ハイホー、仕事が好き」と真逆の意味となっています。高度成長期を前にした日本人の仕事観、あるいは仕事に対する文化の違いが現れているようにおもしろいのですが、この歌は調子が良いだけに頭の中でグルグル回り、吹き替え版を見た子供達は「仕事好き」に洗脳されたかもしれません。

物心ついて比較的記憶に残っている映画は、ウォルトディズニー作の「バンビ」です。この映画が日本で上映されたのは1951年とのことですから、私が5才の時のことになります。吹き替え版が上映されたのは4年後の1955年のことです。当時私は弘前大学の官舎に住んでいたのですが、幼稚園一年生の時に母が病気になり、母はほとんどベットに寝たきりになりました。そのため母の弟に当たる福島市の忠治叔父の家に半年ほど預けられたのですが、「バンビ」はその叔父が連れて行ってくれました。曇りの日で電線が少しうなるほどの風の強い日であったことを覚えております。

総天然色映画の美しさ、ウサギのとんすけやスカンクのフラワーなどの愛らしいキャラクター、動物たちの表情の豊かさ、ディズニー特有の動きのなめらかさ、特にフラワーが花の中から現れるシーンは今でも映画館の空気とともにありありと思い出されます。

風の強い日でもあったせいか、映画は2回ほど停電で中断しました。最も当時停電は良くあることでした。20分ほど待たされました。座席は1/3程度空っぽだったでしょうか、お天気のせいもあってか満員盛況というわけではありませんでした。当時の映画館は今のよう禁煙ではなかったもので、映画館はタバコの煙が充満しており、煙で映写される光の道筋が単色の虹のように変わる有様が綺麗だなと見とれていたことでした。

字幕版でしたので、これも叔父に内容の説明を聞きながら見ておりました。吹き替え版は見ておりませんが、今回調べていたら、初公開版の吹き替え版は、フラワーが永六輔、とんすけが小林桂樹であることを知りました。

ディズニー映画の「ダンボ」も見た記憶があります。1954年日本公開なので、小学校二年生の時、福島で見たのだと思いますが、誰と行ったのかあまり記憶がありません。映画館は何となく覚えています。そろそろ子供アニメも卒業に近づいていたのかもしれません。

このように私が子供の頃に見た映画はアニメでした。ディズニーの良質のアニメであったことは幸せだったといえましょう。

弘前には小学校1年の時まで住んでおりました。そうこうしているうちに父

が名古屋大学に赴任することになり、弘前を離れることになるのですが、母は相変わらず寝たきりでしたので、名古屋には父が一人で赴任し、母は福島の実家で静養することになりました。当然のことながら私も福島に預けられることとなりました。祖父も祖母もまだ健在で、ひょっとすると祖父は孫と暮らせるのでうれしかったかもしれません。私が小学校2年生の時です。

弘前からの母の移動は今でも鮮明に記憶しているのですが、母は大きな板の上に布団を引いて寝かせてられており、そのまま運ばれました。汽車（蒸気機関車）の中では向かい合わせの座席、四席にその板を置き、母は寝ながら移動しました。父の他に名大医局に移籍する松田先生、久保田先生など3、4人の先生がご一緒だったと思います。列車は進行方向右に海を見ながら走っておいりましたので、東北本線ではなく、恐らく奥羽本線経由で福島に向かったものと思います。奥羽本線のほうが空いていたのでしょうか。

私とえば、その当時こけしが好きで、こけしと遊びながら、移動しておりました。時折母が心配で、「大丈夫？」（弘前訛り）と声をかけましたが、微笑ましかったのでしょうか、皆様に笑われ恥ずかしかったことをおぼえております。

福島駅に着きますと、駅に話をつけていたのでしょうか、立ったままで何人も入れるような荷物用の大きな昇降機に乗り、いくつかの線路やプラットホームをそのまま横断して改札側のプラットホームに運ばれました。私も乗りました。下を移動していく線路やプラットホームを覚えています。

そのようにして、小学校2年生の福島時代が始まりました。小学校は福島第四小学校。母は相変わらず寝たきりで、奥の薄暗い座敷に布団を敷いて寝ておりました。結局叔父と叔母が私の面倒を見てくれました。当然、私はしかれることがなくなるわけで、本人の自覚は全くありませんが、今でも皆様の記憶に残るほどの腕白となっていたようで、その当時の方々は、「あのまさきちゃんが医者になるなんて」、とおどろくとのことでありました。事務所の皆様が働いている机の上を平気で歩くは、事務所の棚の中から宣伝用の大量のビラを持ち出し、二階の窓から下の道路にまき散らすは、ネズミの解剖なども平気で行っておりました。

母の実家は母によると昔は名字帯刀を許された福島一の商家だったそうです。「渡辺」姓でした。祖父の時代に兄弟げんかが有り、家は二つに分離してし

まいりました。庭の塀を隔てて同じような商売をしている家があることは知っておりましたが、祖父の兄弟の家とは全く知らされておりました。

祖父の家は福島の新井に有り、駅からすぐの繁華街でした。電車が走る鈴蘭通の一つ目の角を左に曲がり、しばらく行くと祖父の店「渡辺正吉商店」がありました。屋号は○に正の字を入れ、「渡正（わたしょう）」と言われておりました。石炭やコークスなどの燃料、セメントなどの建材を扱っており、馬に牽かれた大きな荷車に、厚い紙の袋に詰められた大量の秩父セメントや宇部セメントが到着し、人足の方々が担いで倉庫に積んでおりました。石炭やコークスは倉庫に山と積まれており、私はその頂に登って悦に入っておりました。ミツウロコの練炭なども山になっておりました。冬の暖は練炭が主でした。必要なときは倉庫から練炭を、また、小さなシャベルを持って倉庫のコークスや石炭をすくって使用するという、まったく便利なものでした。放射線管理区域マークはミツウロコの練炭マークによく似ており、私は見るたびにミツウロコを思い出します。

敷地は広く、敷地の南端には大きなお稲荷さんがありました。店所有のお稲荷さんでした。立派なお狐さんが参道を中心に対に並んでおり、お祭りには屋台が出ました。母に言わせると賑やかにするため祖父が呼んできていたそうです。

お稲荷さんと母屋の間には自動車や三輪自動車が数台楽に置けるくらいのスペース、母屋の隣には倉庫、広場の東には事務所がありました。あの頃の自動車はエンジンがかからないと、棒形のハンドルをボンネット下の穴に差し込み、手でグルグル回してクランクを回転させ始動するものでした。自動車が身近にあったおかげで私は良く自動車（小型トラック）や三輪自動車に乗せてもらいました。三輪自動車というのはハンドルが丸ではなく、オートバイの親玉のように大きなもので、前輪は一つです。後ろにトラックのような荷台がついておりました。これらの自動車の方向指示器は、運転台左右外側の格納容器からぱたっと水平に飛び出す細長い赤い矢印式でした。中にランプが有り、夜は赤く点灯しました。今のようなランプ式方向指示器はもう少し後のことです。

父が母と結婚して5年間子供が授からなかったそうです。待望の長男がうまれてうれしかったのだと思います。私の名前は「正樹」ですが、父が「湯川秀樹」氏の名前を伝え聞いており（ノーベル賞受賞前）、とても偉い学者がいると

言うことで、「樹」をもらった、と母はよく申しておりました。父らしい先見の明があったと思ったのですが、しかし、長じてからよく考えてみますと、私の母方の祖父の名前は「正吉」、父方の祖母の名前は「サキ」でした。つまり、私の名前は祖父の名前から「正」をもらい、祖母の名前の「サキ」をもらい、読み名を「まさき」とし、「き」は祖母の名がカタカナだったため湯川秀樹氏の「樹」を当てたということになります。自分の母の名前や母の父の名前をこっそり息子に忍ばせたのは、父らしい名付けだと思いますが、祖父や祖母の名前が入っているとは一言も聞いたことがありません。まさかこの名付けが無意識であったとは思えませんので、テレがあったのでしょうか。

余談ですが、私の息子は「啓太」といいます。長女の時もそうでしたが長男が生まれたときも父は大変喜び、孫の名付けに積極的でした。父は当時浜松にいたので、私は「大輔」、「啓太」、etc., のいくつかの名前を用意し、電話で相談致しました。私は「大輔」の名前を押したので、「まあ、うちに少し豪快な名前があってもいいか」と、父の言葉でいったん決まりました。しかし、その少し後に再び電話があり、「辞書を調べたら啓太という名前は、始めを開くと言う意味があるからこれが良いぞ」とのことでした。父の哲学が入っていたので、反対する理由はなく、決定となりました。ちなみに長女の夫の名前は「大輔」という落ちがついており、私の当初の願いは達成されております。

父は5人兄弟の三番目でした。長男・太一、長女・ハマ、次男・信次、三男・敏夫、四男・宏吉です。敏夫叔父は第二次世界大戦で戦死しています。

安達中学卒業の翌年18歳で父の父親が亡くなりました。祖母は教育熱心な母親だったとのことです。父が二高受験の準備をしていた時期でした。兄太一叔父の商売は傾いておりました。学費の心配があったのでしょうか、祖母は嫁入りの時に実家からもらってきた土地を手放し、父を卒業させたとのことです。父はサキおばあさんに生涯感謝していたと母が申しておりました。私の名付けに自分の母の名前をこっそり忍ばせたのもその様なことだと思います。また、自分の母親からもらった小さな木の本棚を自分の書斎の目の届く場所に置き、生涯大切にしておりました。

小学校の行き帰りは子供の足で、15分ぐらいの所だったでしょうか。通学路に映画館が二館ほどありました。一つは店の近くの電通という大きな建物の前、もう一つは電通どおりから左に曲がった今で言う二車線ぐらいの小道に

沿ってありました。電通の門の前には大きな台のような円柱があり、その上に座って道路を隔てた映画館をよく眺めておりました。、あるとき映画館を十重二十重と取り囲む大行列が出現しました。子供にとっては事件です。上映作は黒澤明監督の「七人の侍」でした。何時間待ちだったことでしょうか？ 上映時間207分の映画です。予告編などを入れたら随分待つことになったと思いますが、当初行列がなくなることはありませんでした。日が経つにつれ少しずつ落ち着いていきました。ちなみに私が「七人の侍」を見たのは随分後のことになります。

その映画館の前の広い敷地の建物寄りの真ん中に、いつも立て看板が置かれており、上映中のポスターが貼られておりました。時々身近によって映画のポスターをしげしげと見ていたのですが、成瀬巳喜男監督の「浮雲」のポスターは、映画の名前の寂しさとともに、子供心に随分印象に残ったものでした。ちなみに、この映画をいまだに見る勇気がありません。

電通どおりを左に曲がった小道を少し進むと右沿いに映画館がありました。スチール写真を沢山貼った窓がありいやでも目に入ります。昔の映画館は各シーンの写真をスチール写真として、ウィンドウに沢山貼っていたのです。満開の桜の下を子供達と走る女性の写真がありました。なんと綺麗な写真なのだろうと、通学の行き帰りに立ち止まり、見とれておりました。木下恵介監督の「二十四の瞳」でした。モノクロなのですが桜の花は今見てもとても美しく、カラーにはない美しさがあります。この映画を鑑賞したのはずっと後になってからです。前半の童話的な美しさとは裏腹に、強い反戦の意味が込められていることに、映画を見て始めて強烈に気付かされました。不覚でした。映画の知識としては知っていたのですが、やはり実物を見ないとわかりません。

—つづく—

(TML 代表)